

『平家物語』における平宗盛

— その存在の特異性をめぐって —

佐倉由泰

目次

- 一 はじめに
- 二 社会の中の宗盛
- 三 集団の中の宗盛
- 四 宗盛と自己救拔
- 五 宗盛の機能と類型性

一 はじめに

『平家物語』において平宗盛は凡庸な人物として形象されている。まさに凡庸の一語に尽きてしまうかのような宗盛に作品世界における存在の意味を見出せるのか。本考察はその意味の重要性を認める立場から、彼を凡庸な存在と意味付けている論理と根拠を問い直し、そのように形象化する必然性を探ることによって、『平家物語』という作品の深層に横たわる仕組み、機構の重要な一側面を明らかにしようとするものである。

『平家物語』は鮮明な輪郭と鮮烈な光芒を志向する作品であり、明確な論理、倫理、行動様式を付与するような人物形象はそのまま肯定、賛美を意味する。平重盛、平知盛、建礼門院徳子の形象化はその典型的な例である。この三者についての問題は以前に論じたこ

とがあり、それぞれが独自の論理において自己完結し、互いに没交渉のままに個々別々の方式で作品世界を静態化、秩序化する機能を果たしていると規定した。最終的に『平家物語』の多様性の認定に行き着いたわけだが、今回の考察はそこに宗盛の問題を取り込むことで作品理解のさらなる深化を目指すものでもある。

『平家物語』には、重盛、知盛、建礼門院に限らず独自の光芒を有する幾多の人物が登場する。それらの光芒の束が『平家物語』の文芸世界の彩りとなっているのだが、この多様な光彩の中で宗盛は△暗部▽である。ただし、この規範性、様式性の欠落としての△暗部▽は、作品世界の多様な光芒の間に介在し、ある重要な機能を担う。宗盛は、作中互いに没交渉である登場人物たちの個々と関係性を結ぶひとつの要、放射状をなす人間関係の中心として位置しながら、かかわる相手の価値を際立たせる役割を果たしている。その中で、彼自身は負性、劣格性を一身にかかえ込んで行くことになる。

これからそのような宗盛のあり方を具体的に明らかにしながら論を進めて行きたいが、その前に先覚の研究と本考察との関係について言及しておきたい。『平家物語』の宗盛についての特に主要な研究として、鈴木則郎氏^(注1)、和田英道氏^(注2)、山下宏明氏^(注3)の考察があり、本考察は先覚各氏の指摘、見解に負うところが大きい。殊に山下氏

の考察と問題意識において重なり合う部分が多い。氏は、宗盛の形象の意味を『平家物語』の物語としての論理や叙法との関連において把握することを目的に据えて考察を展開し、重盛と宗盛との関係性や「対照法」と命名された叙法のあり方などについて貴重な指摘をされている。本考察は、山下氏と論の出発点をほぼ同じくし、しかも氏の見解に多くの示唆を受けながら、筆者なりの作品理解の観点から宗盛の形象の意味を総合的に明らかにしようとするものである。その中で、山下氏が注目されたのと同じ作中の場面や叙述について言及することもあるが、『平家物語』の宗盛を総合的に捉えようという本考察の性格上、その重複を特に避けないで論証に組み込んで行くことをあらかじめお断り申し上げておきたい。

なお、テキストは考察の論点を集中させるために数ある諸本の中の日本古典文学大系本(寛一本)^(注5)のみに限定する。

二 社会の中の宗盛

作中、宗盛が最初に負性、劣格性をかかえ込むのは兄重盛との対比においてである。重盛は、自らの存在の根拠を「良臣」、「孝子」であることに求め、神仏への畏怖の念をもとに、公的秩序の護持と平氏一門の繁栄の持続のために行動する人物である。彼の行動は専ら父清盛の「悪行」の抑止に向けられるが、その中で重盛は儒教の徳と仏の教えとを体現する人格と、ひとたび号令すれば一万余の軍兵を即座に集める(巻第二「烽火之沙汰」)ような権威を具えていることを示す。重盛は文武それぞれの理念を調和的に兼備した理想的な朝臣として形象化されており、そのような重盛との対比は早くも宗盛の負性、劣格性を決定的に露呈させる。

あはれ、是につけても兄の内府には事の外におとりたりける物

哉。一年もかゝる御めにあふべかりしを、内府が身にかへて制しとゞめてこそ、今日までも心安かりつれ。いさむる者もなしとて、かやうにするにこそ。行末とてまたのもしからず

(巻第三「法皇被流」、大系本上 二六二頁)

治承三(一一七九)年十一月、清盛による院政停止のクーデターが起こって、後白河法皇は幽閉されることになるが、その決定を告げた宗盛に幽閉先の鳥羽殿までの随行を求めたところ拒まれる。右に挙げたのは、それに対して法皇が抱いた感慨である。ここでは、作品世界の秩序の中心に位置する後白河法皇によって、亡き「兄の内府」重盛と宗盛との優劣の対比が断定的になされている。宗盛の随行の拒否は「父の禅門の気色に恐れをなし」たからであるとされており、父清盛の命令に恐懼してその伝達者の域に自足するという彼の定見なきあり方が浮き彫りになる。宗盛は独自の論理も倫理も持ち合わせていない。

法皇が「内府が身にかへて制しとゞめて」としているのは、約二年前の鹿の谷事件で、清盛が法皇を平氏打倒を計画した中心人物と目して幽閉しようとした時に重盛が諫止したこと(巻第二「教訓状」、「烽火之沙汰」)を指す。その諫止の場面で、すでに重盛と宗盛とはさりげなく対置されている。重盛が清盛に諫言すべく着座することの記述に「おとゞは舎弟宗盛卿の座上につき給ふ」とある。重盛がすぐ下の弟宗盛の上座を占めるのは至極当然ながら、ことさらに宗盛が引き合いに出されていることの意味は看過できない。この場面、「一門の卿相雲客数十人」が武装して参集し清盛の指揮下に入っているはずなのだが、その中で具体的に名が挙がっているのはこの宗盛だけである。他の人々は匿名性に埋没し、特定の個人、たとえば知盛や重衡にしてもその場にいたという断定はできないわ

けて、重盛との対置が回避され、指弾の埒外に置かれる。宗盛ひとり清盛の企てに無定見に従った者として、あるべき理を通そうとする重盛と対置される形になっている。重盛と宗盛との席次の上下は兄弟の別以上に人格の優劣を示す。

この重盛が宗盛の座上を占める場面は、『平治物語』における公卿僉議の場で藤原光頼が藤原信頼の座上に着くことを想起させる。

これも着座の上下で人格の優劣を印象的に呈示する場面である。また、このような場面の類似以上に『平家物語』の宗盛と『平治物語』の信頼とは共通性がある。いずれも人格上の負性、劣格性の露呈をもって戯画化され嘲笑的となつてしまつてゐる。

宗盛の戯画化は巻第四「競」の段に顕著である。ここには、源頼政が後白河法皇の皇子、以仁王を戴いて平氏打倒を企てるに至つた理由が語られている。原因はすべて宗盛の言動にある。まず宗盛が頼政の嫡子、仲綱から無理に木の下という名馬を乞い取るが、彼は仲綱が当初譲渡を惜しんだのを憎み、腹いせに木の下に「仲綱」と金焼きし、人々の前で「その仲綱めに鞍おいてひきだせ、仲綱めこれ、仲綱めうて、はれ」などと放言する。これを聞いて、頼政、仲綱父子が憤激したのは言うまでもなく、彼らは報復を念じて拳兵を企てるに至るのである。

『平家物語』はこのエピソードを「人の世にあればとて、すぞろにすまじき事をもし、いふまじき事いふは、よく／＼思慮あるべき物也」という教訓をもつて意味付けている。まさに宗盛の無思慮で心ないあり方を際立たせる話となつてゐるのだが、この話に続いて、「これにつけても、天下の人、小松のおとゞの御事をぞしのび申ける」という叙述が現れてすでに亡き重盛が話題になり、さらに宗盛の場合とは対照的な重盛についてのエピソードが語り出される。重

盛が中宮徳子の許を訪ねた折のこと、そこで八尺にも及ぶ蛇を見つけ周囲に気付かせずに捕えて捨てようとしたところ、仲綱が重盛の意を受けて見事な働きを示す。後日、重盛はその賞として仲綱に馬を贈つたというのである。この話は重盛の思量の深さ、心ばえの良さをもの語つており、仲綱と馬という共通の題材を挙げながら宗盛に比して重盛がいかに優れていたのかを際やかに浮き彫りにしている。重盛と宗盛との優劣の提示は、この二つのエピソードの対置で極まつていると言えよう。実際に次のような集約的な批評もなされている。

いかなれば、小松おとゞはかうこそゆゝしうおはせしに、宗盛卿はさこそなからめ、あま(あま)さへ人のおしむ馬(ま)こひと(ひと)して、天下の大事に及ぬることうたてけれ

この「競」の段における宗盛への冷視はさらに続く。確かに頼政の拳兵は失敗し、以仁王も頼政、仲綱父子も戦死を遂げてしまふのだが、宗盛個人への報復は半ば果たされることになる。渡辺党の競が見事に宗盛を出し抜いて彼から贈られた媛(なつら)廷(てい)という馬に乗って頼政の許に馳せ参るのである。しかも、仲綱がその馬の尾髪を切り、「昔は媛廷、今は平宗盛入道」という金焼きまでして送り返したため、それを見た宗盛が「おどりがり／＼いか」という結末を見る。宗盛の心なく他愛のない言動は痛烈な嘲罵をもつて報われ彼のやり場のない怒りはせん方ない身体表現に自足するしかない。「おどりがり／＼いか」る情景は微塵も恐怖感をもたらずことなぐひたすら滑稽である。

その点、父清盛の激怒とは似て非なるものがある。作中、清盛の怒りは空回りせず容赦ない制裁を発動する。『平家物語』における清盛の存在性を一語で示すならば「過剰」と言えよう。制御のき

かない激越な感情がそのまま過大な暴力の行使となって開放され、予想外に深刻な事態をもたらしてしまうのである。宗盛は清盛の持つ過剰さを受け継いでいない。それだけにただただ戯画化を許すことになる。

むしろ宗盛の怒る姿は再び『平治物語』の信頼を想起させる。

(前略) 信頼、「出しぬかれぬく」と云て、大の男の肥多ふとりたるが、踊上くしけれど、板敷のひゞきたるばかりにて、踊出したる事もなし (新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』一八二頁)

これは、頼みにしていた藤原経宗、藤原惟方に背かれ、しかも後白河上皇と二条天皇が内裏を離れてしまったのを知った折の信頼の様子を語る叙述である。「踊上く」怒る姿が嘲笑的に戯画化されているのは宗盛の怒りの描写とまさに一致する。この一致は、宗盛と信頼がそれぞれの作品において同様な位相にあること、すなわち△暗部▽であることを端的にも語っているのではないだろうか。

『平治物語』の冒頭部で信頼はその人となりや「文にもあらず、武にもあらず、能もなく、又、芸もなし」と設定されているが、そこまでの明言はなくとも『平家物語』の宗盛も同様の姿を露呈している。文武それぞれの理念の調和を理想的に体現する朝臣、重盛との対比が、資質、心性に何の取り柄もなく、政治的、社会的に無用な宗盛のあり方を鮮明にする。逆に宗盛と対置されることで重盛の理想的な資性がひときわ宣揚される形になっている。このような重盛と宗盛との対置は、これまで取り上げた場面、叙述にとどまらず作中に執拗に仕組まれている。

おかしかりしは入道相国のあきれさま、目出たかりしは小松のおとゞのふるまひ。はいなかりしは右大将宗盛卿の最愛の北

方にをくれ奉て、大納言大将両職を辞して籠居せられたりし事。兄弟共に仕出あらば、いかにめ出たからむ (巻第三「公卿揃」、大系本上 二二二頁)

これは、巻第三「御産」の段の場面に關する集約的な叙述であるが、中宮徳子の難産に気をもみ途方に暮れていた清盛の「おかし」き姿に、重盛の冷静で適正な振る舞いを対置し、さらに、この重盛「目出た」きさまに、宗盛の「はいな」き不参を並べている。清盛と重盛との対比はともかくとして、最愛の妻に先立たれたの籠居という宗盛の不遇、悲嘆を表す事態はむしろ言及されずともよいところを、ことさら重盛の晴れがましさと対置されている。それによって、宗盛の不参は同情されるよりも、彼のみじめさ、劣格性を印象付けることになってしまっている。対置するにそぐわないような場面であえて重盛と並べられることで、宗盛は負のイメージをかかえ込んでいるのである。

また、巻第三「医師問答」の段には、重盛の半ば自裁とも言える死が語られるが、彼の死を世人がこぞって「此後天下にいかなる事か出こむずらむ」と嘆き合う中、宗盛の「かた様の人」は、「世は只今大将殿へまいりなんず」とよろこんだということがことさら提示されている。この一連の叙述によって、重盛の人望の篤さや希望も抱かずに彼の存在をまったく度外視していること、また、宗盛を取り巻く者たちの了見の低劣さ、さらに、宗盛本人の言動はないまでも重盛と宗盛との間には他人同然の埋めがたい深い溝があることが現れているのである。ここでは、重盛と宗盛とが兄弟でありながら両者に何らの交流も共通点もないことが示される中、その優劣が強調されている。重盛も宗盛もそれぞれ平氏一門の中で特異な存

在であるが、重盛は神仏にも通ずるような神秘性さえ帯びた優れた資性ゆえに、宗盛はそれと対極をなす劣格性ゆえに特異なのである。

以上、兄重盛との対比において、宗盛が負性、劣格性をかかえ込む状況を具体的に見て、検討や指摘を行ってきた。これは、山下宏明氏が、意図的な対比、語り分けによって宗盛は重盛の「かげの存在」とされているというように結論付けられた様相を筆者なりに再確認してきたことにもなる。ただし、宗盛を重盛の「かげの存在」あるいは「重盛のかげにかくれた二流の人」とする山下氏の規定を言い換えて捉えたいとも考える。宗盛は、重盛の「かげ」に置かれた「二流」の人物というよりも、重盛とはまさに対極にある存在として前面に押し出されて形象化されているのではないだろうか。そのように規定する方が、以後の論述の中で明らかにして行くことに属するが、作品世界において宗盛が特異な存在、すなわち「暗部」として独自の重大な機能を担っていることが見やすくなるように思う。全体的に賛同しながらあえて小異を唱えるに似るのだが、このような理由から山下氏の規定をややずらした形で『平家物語』の宗盛を把握しようとするのである。

史実における宗盛はおそらく「二流の人」であったの（注）が、物語の中の宗盛は、政治的な論理性や判断力がほとんど欠落しており、無能さを露呈している。ことさらに無定見、無意志であるときれ、国家的、社会的に無用な存在と意味付けられて、そのような宗盛の政治への参入は社会にとって望ましくならぬ状況を出来させるような形にもなっている。作品世界において、宗盛は規範性、様式性の徹底した欠落としての「暗部」なのである。

なお、このように宗盛の存在のあり方を読み取っているため、山下氏が作品後半での宗盛の行動を支える論理に特に言及し、その明

確化を試みておられることについては、筆者なりの異なる立場を明らかにしておきたい。山下氏は次のような見解を示されている。

その時その時を生きのび、逃げのびようと意図し続けて来た宗盛の行動の論理は、外ならぬこの帝王と神器を帯ずるといふ名分にあつたわけである。(注)

確かに、宗盛が政治的な名分を発現する源として安徳天皇と三種の神器を重視していたことは否定できないのであるが、問題は宗盛がこの考えをどこまで論理化し、行動の志向性を定めているかという点にある。少くとも、作中、彼が安徳天皇と三種の神器の存在をもとに自己を規定したり、行動の意味や目的を明確に意識化しているように描かれているとは認めがたい。宗盛の、とにかく生きんとする行動には、それを肯定するような積極的な論理はないとするのがありきたりとは言え穏当な読み方ではあるまいか。宗盛は自らが生きたため、あるいは、都で自己を取り巻いていた日常性を何とか手離さないために、政治的な名分への依存を示すものと考えられ、安徳天皇と三種の神器の行く方に自らの運命を帰一させようという意識、姿勢までは認められない。『平家物語』の宗盛は最後まで「見るべき程の事」を見出し得ない人物なのである。そこにこそ宗盛の作品世界における存在の特異性と意味があると捉えるのが筆者の立場である。後述するように、彼の存在の重さは没理的な心性と行動においてよく現れている。

宗盛は物語前半で早くも事あるごとに重盛と対比され、神仏、国家、社会を意識した広い展望を持って公的秩序の安定を図ろうとする重盛に対し、そのような思量をすべて欠いた人物とされている。重盛は自身が「良臣」、「孝子」であり得ないような望ましくならぬ世界に身を置くことを厭い、極楽往生を願ってすみやかな死を遂げて

しまうが、宗盛は重盛による平氏滅亡の予言を知るよしもなくそこに身を置き続けることになる。やがて清盛も幾多の「悪行」をなした末に没し（巻第六「入道死去」）、宗盛は名実ともに平氏一門を領導すべき棟梁の地位に就く。しかし、宗盛はその任によく堪え得る人物ではなく、そのような中、弟の知盛の存在が前面に現れてくる。そして、以後、宗盛は主に知盛と対置され、負性、劣格性をかかえ込んで行くことになる。

三 集団の中の宗盛

寿永二（一一八三）年五月、北陸道における木曾義仲の軍勢との戦いで潰滅的な敗北を喫した平氏は、同年七月、義仲軍が上洛の勢いを示す中、抵抗することなく都を離れる。平氏の没落を明瞭に印象付けるこの都落ちを決定したのは宗盛である。

此世の中のあり様、さりととも存候つるに、いまはかうにこそ候めれ。たゞ都のうちでいかにもならんと、人々は申あはれ候へども、まのあたりうき目を見せまいらせんも口惜候へば、院をも内をもとり奉て、西国の方へ御幸行幸をもなしまいらせてみばやとこそ思ひな（シ）て候へ（巻第七「主上都落」、大系本下 九四頁）

このように宗盛は建礼門院に都落ちを行う事情を語っているが、この言葉から宗盛が一門の中で大勢を占めていた、「ただ都のうちでいかにもならむ」という抗戦論を斥けて都落ちを決めたことが分かる。一見それは宗盛の統率力をもの語るようでもある。ただし、その決定を行う上での理由があまりはかばかしくない。宗盛は抗戦すれば敗れるとすっかり諦めており、それを避けてまず西国へ逃れてみようと思うようになったという意味のことを述べている。先行

きに対する展望がまったくない、悪く言えばその場しのぎの決定であり、彼は、都での常態を西国へ移行してみようと考えているわけである。自身を取り巻く日常性を何とか温存しようという宗盛の心性が現れた決定と言えよう。抗戦論を斥けるだけの積極的な根拠は示されていない。

ただし、結果論から言うと、平氏は都落ちによって勝ちに乗ずる義仲軍との衝突をひとまず避けて時を待つうちに、水島、室山の二度の合戦に勝利し、敵方の内訌もあって、摂津国一の谷まで勢力を挽回することになる。帰京を目前にするような勢いを示すに至るのである。この時点までを取るならば、宗盛の都落ちの決定は誤っていなかったのであり、一時の不名誉と苦難を忍んでの高等な判断であったと言えなくもない。だが、問題は、都落ちの際の宗盛にそれを不名誉とするような心性と戦略的な思量が認められないことにある。さらに、抗戦を主張した中心人物、知盛が確かな廉恥心の持ち主として宗盛と対置される形で肯定的に捉えられている以上、『平家物語』には結果論から宗盛の決定が是認される余地などない。平氏の一の谷進出に宗盛の功を認めるような享受はほとんどあり得ないという叙述内容になってしまっている。衆目はむしろ水島、室山の合戦などを指揮した知盛、教経、重衡らに功を認めるであろう。知盛は、都落ちの際、頼盛の一門からの離脱などを目のあたりにして、次のような言動を示している。

其時新中納言涙をはら／＼とながいて、「都を出ていまだ一日だにも過ぎるに、いつしか人の心どものかはりゆくうたてさまよまして行すゑとてもさこそはあらんずらめとおもひしかば、都のうちでいかにもならむと申する物を」とて、大臣殿（宗盛のこと——引用者註）の御かたをうらめしげにこそ見給ひけ

れ（巻第七「一門都落」、大系本下 一〇九頁）^(註19)

この叙述から知盛が抗戦論の中心人物であったことをうかがい知ることができ、彼の「都のうちでいかにもならむ」という主張は、人々の離反による平氏の自壊、その悲惨で不名誉な末路を懸念してのものと捉えられ、そこには平氏の武家としての体面を第一に尊重する知盛の心性が認められる。「都のうちでいかにもならむ」とは、平氏方全軍が一丸となれる状況で死命を決する一戦を交えようという主張で、たとえそれが滅亡を早める結果を招来しようとも武家としての名誉は願せると考えているのである。知盛には、重盛のように神仏、国家、公的秩序までを把握する社会的な展望はない。彼にとつては、源氏と並ぶ伝統ある武門としての平氏の名誉がすべてなのである。

都落ちをめぐる宗盛と知盛との見解の相違は廉恥心の有無という優劣の図式に置き換え得るものである。一戦も交えずしての逃走とも言える都落ちは武門にとって不名誉なことであるが、その責はすべてこれを独断的に決定した宗盛に帰することになる。知盛は、宗盛の決定に反対する抗戦論の中心人物であったことで指弾の圏外に立ち、むしろ彼の廉恥心や覚悟が武人にふさわしい優れた資質として賞讃的に捉えられている。平氏全体の不名誉を宗盛ひとりがほとんどすべてかかえ込み、知盛の優越性がそのまま平氏全体の存在性を表すようなことが本格化し始めている。平氏一門の集団としてのあり方の中で、宗盛の位置が限りなく周辺化し、知盛が中心に位置するような移行が起こっていると見えよう。また、都落ちの不名誉な側面を宗盛がひとりかかえ込むことで、他の一門の人々の都を離れて行く姿が負のイメージをすべて払拭されて哀れに美しく描かれているとは考えられないだろうか。忠度、経正、維盛らの都落ちの

場面がその典型的な現れと言え、彼らにはいかなる責もなく、都落ちが不可避的なやむにやまれぬものとしての意味を帯びる中、各人が精一杯の思いのほどを示していることになる。

このような様相は、平氏が集団的に潰滅する壇の浦合戦でも同様で、そこでは知盛が前面に現れて平氏の武門としての誇りを象徴する。平氏方全軍の勇を鼓舞するのも彼である。

いくさはけふぞかぎり、物ども、すこしもしりぞく心あるべからず。天竺・震旦にも日本我朝にもならびなき名将勇士といへども、運命つきぬれば力及ばず。されども名こそおしけれ。東国の物共によはげ見ゆな。いつのために命をばおしむべき。是のみぞおもふ事（巻第十一「鶏合壇浦合戦」、大系本下 三二九頁）

勝敗も自らの生死の行く方も度外視して名誉のみ重んじて勇戦せよとする、この知盛の下知の後、本格的に戦端は開かれる。また、戦いの終幕も、同じく知盛が「見るべき程の事は見つ、いまは自害せん」と述べて入水を遂げることをもって訪れる。石母田正氏が「平家物語のなかで、おそらく千鈞の重みをもつ言葉であろう」と評した^(註20)、この知盛の言葉は、平氏の歴史的な終焉を告げる宣言としての意味を持つ。壇の浦合戦は知盛に始まり知盛で終わり、その間の戦闘の過程を彼はすべて見通したことになる。知盛のまなざしは敵よりも自軍に対してその規範化を期して注がれており、その対象自体の潰滅が現前するに至っては、もはや彼に「見るべき程の事」は存在せず、自身が武人としてのあるべき死を遂げることが残されるばかりとなる。このような知盛に敗将としての自責や後悔の念はなく、むしろ満足や安堵感すらにじませた諦観が認められる。知盛にとつては、すべてが「運命」によってしからしむるところと

なっている。

しかし、いかなる「名将勇士といへども、運命つきぬれば力及ばず」とは言っても、具体的な戦闘状況の中で平氏方に敗因がないはずはない。『平家物語』は、壇の浦合戦における平氏方の決定的な敗因を阿波民部重能の裏切りに求めている。そして、戦端が本格的開かれる前、この重能への対処をめぐって宗盛と知盛との間に意向の相違が見られることが注目されるのである。

まず、知盛が重能に離反する気配があるのを察知して戦いに入る前に斬るよう宗盛に進言する。都落ちの時は大番役で上洛中の畠山重能ら東国武士を助命するよう宗盛に勧めたり（巻第七「聖主臨幸」）、一の谷合戦での敗走の折は自分の馬が敵の手に渡るのもかまわずにこれを殺すことを許さなかった（巻第九「知章最期」）ように、情ある心性を示していた知盛が、ここでは「あはれきやつが頸をうちおとさばや」と思って「太刀のつかくだけよとにぎ」りしめるほどに重能を殺すことに執着している。これは、離反のような規範の乱れを武門にとつての深刻な不名誉として最も嫌悪する、知盛の心性の現れと解せるのだが、注目したいのは、重能を斬ろうとする言動があることによつて知盛が敗北の責を免れているという点である。一方、その責はすべて宗盛に帰する。彼は、知盛の進言を受けながら、「見えたる事もなうて、いかゞ頸をばざるべき。さしも奉公の物であるものを」と応じ、重能を呼び出しはしたものの勇戦を励ますにとどめる。衰運にある平氏をよく支えてきた重能をさしたる証拠もなしに斬れないという宗盛の考えは、穏当で情あるものと言えなくもない。また、一方の知盛の進言をあまりに冷徹で酷薄なものとする捉え方があっても不思議ではない。しかしながら、重能の裏切りという厳然たる事実の出来、これが平氏方の敗北を決

定的にしたという動かしようのない結果がそのような読みの可能性をほとんど封殺し、重能への対処が問題化する場面は、知盛の卓抜な洞察力をもの語るとともに、宗盛の救いようのない凡庸さを印象付けている。

知盛は、宗盛による「御ゆるされなければ、力及ばず」という事情で重能を斬りたくもかなわなかったのであり、知盛の意向の障害となった宗盛が壇の浦合戦での平氏方敗北の責をひとり負うことになる。それによつて、知盛は敗将としての不名誉をまったく蒙ることなく、また、知盛以外の一門の人々にも敗北の責がないという形になっている。宗盛は平氏一門の中心に位置すべき人物でありながらこれを支えるような存在意味を帯びず、平氏一門の武家集団としての存在性に彼がかかわるところは微塵もない。宗盛以外の一門の人々は知盛を精神的支柱と仰ぐ、あるべき武家集団の成員として肯定され、美化されることになる。宗盛の疎外をもつて、平氏の滅びの美は立ち現れる。

以上、宗盛と知盛とが対置される場面を見てきたが、知盛の荣誉は宗盛の不明に支えられていると言えよう。知盛が、敵よりもむしろ「運命」と向き合うという具体的な勝敗を超越した高次なレベルに立つ武将として理想化されているのは、宗盛の存在を踏み台にすることによつて実現しているのである。知盛は宗盛の不明な意向を不満とする身振りを見せることで、敗將の汚名を免れ、優れた武人としてのあり方を鮮やかにアピールしているのである。その分、宗盛が平氏という集団の中で深刻な負性、劣格性をかかえ込んでいることは言うまでもない。

壇の浦合戦については、さらに知盛と宗盛との優劣を際立たせる場面がある。戦いの敗北は知盛が判断し、彼の「世のなかいまはか

うと見えて候」という言葉によって一門の人々に告げられるが、それを受けて、二位殿時子は安徳天皇を抱いて海中に身を投じ、教盛、経盛らもそれぞれ手を組み合せて次々と入水する。この人々の姿は最後の確かな連帯が現れている。ところが、多くの係累の連帯の圏外に置かれる形で、宗盛とその子清宗は、「ふなばたに立いでて四方みめぐらし、あきれたる様にておはしける」といった状態でいる。この「あきれたる」とは、自身を圍繞していたあらゆる日常性が消滅するのを目の前にして、その現実を受け止めかね、どのように対処してよいか判断できずにただ茫然としている状態と解したい。その「あきれたる」様子を見かねた侍たちが脇を通るふりをして宗盛を海を突き落とすことになるが、彼は続いて身を投じた清宗とともに海上に浮いたままである。その姿は、「なまじゐに究竟くわいぎやうの水練にておはしければ」という理由まで付されてことさら戯画化されているが、結局、父子ともに捕われの身となる。それを見て奪還を試みた宗盛の乳母子、飛驒三郎左衛門尉景経は奮戦もむなしく最期を遂げてしまう。このような宗盛のあり方は、知盛が「見るべき程の事は見つ、いまは自害せん」と述べて、かねてからの約束どおり乳母子の伊賀平内左衛門家長と手を取り組んで入水して果てたのとまさに対照的である。「見るべき程の事」を知り、それがなくなると同時に死を意識した知盛に対し、宗盛は、「四方みめぐらし」でもその視線は何ら焦点を結ばず、「あきれたる」状態のまま捕われの身となる。知盛と宗盛との優劣の提示は、この壇の浦合戦における身の処し方の対置に極まっていると言えよう。

このように宗盛は知盛との対比において武家の棟梁としての不適格性を露呈する。重盛との対比で国家、社会の中での存在意味を否定された宗盛は、知盛との対比では集団における存在意味も完全に

否定されている。そして、宗盛は知盛の優れた意図を妨げる者とされており、重盛が観念的に予言した平氏滅亡を具体的に招来する存在として意味付けられている。

四 宗盛と自己救抜

宗盛は、朝家の重臣としても、武家の棟梁としても不適格性を露呈し、何ら理も持たぬまま見るべきものを見出せずにいるのだが、壇の浦合戦で海上に浮いている時に、彼は唯一まなざしを注ぐ確かな存在と向き合っているようである。

大臣殿だいじんどのは右衛門督しづまばわれもしづまん、たすかり給はばわれもたすからんとおもひ給ふ。右衛門督も、父しづみ給はばわれもしづまん、たすかり給はば我もたすからんとおもひて、たがひに目を見かはしておよぎありき給ふ程に（後略）（巻第十 一「能登殿最期」、大系本下 三三九頁）

父が子の、子は父の決定にすべてをゆだねてどちらも進退を定めかねている状態は否定的に捉えられているが、ここで両者が交わすまなざしは互いがそれぞれにとってかけがえのない存在であることを明確にも語る。宗盛の視線は初めて焦点を結び、同時に彼は初めて他から存在価値を認められている。社会的、集団的意味が取り払われた、子の清宗と向き合う実にはかない場において、宗盛に子を持つ父としての存在の意味が付与されているのである。

しかし、この場面が現れて後の叙述においても、宗盛は負性、劣格性をかかえ込み続ける。罪人として都の大路を渡され、人々の視線にさらされた時には、子の清宗が「うつぶして目も見あげ給はず。誠におもひいたるけしき也」という様子でいるのに対し、宗盛は「四方見めぐらして、いとおもひしづめる気色もおはせず」という

態度を示す（巻第十一「一門大路渡」）。周囲を見回しても何ら見るべきものを見出すわけもなく、ただただ廉恥心の欠如を露呈することになってしまっている。

また、彼は鎌倉の頼朝との対面のため東海道を護送されて行くが、その途次にも、護送の任を務める義経に対し、「あひかまへて今度の命をたすけてたべ」とか、「たとひ多ぞが千嶋なりとも、甲斐なき命だにあらば」と述べる（巻第十一「腰越」）。かつては従一位内大臣という官位にあり、平氏の棟梁でもあった宗盛のこの言動を作品の語りは「口惜」と評している。プライドの欠如に対する非難の言である。

そして、宗盛は頼朝の前に据えられることになるが、その折には、頼朝の言葉を取り次いだ比企能員に向かって「みなをり畏」という動作を示す（巻第十一「大臣殿被斬」）。平氏を滅した張本人で、かつての自身の位階よりも格下である頼朝のそのまた家人の能員に対するこの態度を作品の語りは「うたて」と評する。また、その場にいた多くの武士たちも、「みなをり畏、給ひたらば、御命のたすかり給べきか」と指弾し、すでに死すべき身でありながら捕われここまでするようになったのもなるほどのもっともだと語ったとされる。一部に同情の涙を流す者もあったという風聞も付加されているが、この場面の宗盛の不名誉は覆うべくもない。

この場面は、状況の類似から、巻第十「千手前」の段における重衡と頼朝との対面の場面を想起させるが、そこで重衡は兄の宗盛とはまったく対照的な態度を見せている。重衡は、勝者としての優越をことさら誇示するような頼朝の発言に対して、東大寺、興福寺炎上は自身の責ではなく「不慮」の出来事であると述べ、また、平氏の没落についても平氏自体に何らかの非があったからではないと断

言する。さらに彼は武士にとって敵の手にかかって死ぬのは恥ではないとした上で、「たゞ芳恩には、とく／＼かうべをはねらるべし」と言い放ち、それ以上の言動を一切加えない。重衡は捕虜としての宿命に耐えながら武人にふさわしい態度を貫いており、その姿は周囲の武士たちの感涙を誘ってさえもいる。このような態度は、重衡が法然の教えに支えられ、自らの行く手に阿弥陀如来の救済を見据えていることよって示し得たものと言えよう。重衡は極楽往生を志向する強固な意識を持って自己救済をなし遂げつつある。きわめて意志的に捕虜の境遇に耐える重衡に対し、宗盛はひたすら敵からの恩情に期待している。

宗盛は、鎌倉を離れて東海道を上る折には、いつ斬られることかと恐れる。特に頼朝の父、義朝が平治の乱で最期を遂げた尾張国内海ではきつと斬られると思っていた。だが、そこも過ぎたので、宗盛の心に存命への期待がふくらみ、「さては命のいきんずるやらん」と口にする。これを聞いた子の清宗は、「か様にあつき比なれば、頸の損せぬ様にはからひ、京ちかうな（し）てきらんずるにこそ」と思いながら、父へのいたわりからそれを言葉にせず、ひたすら念仏を唱えていたとある（巻第十一「大臣殿被斬」）。この場面の存命を期待する宗盛の言動は、作品の語りによって「はかな」と評されている。そして、先に挙げた都の大路を渡される場面と同じく、こども宗盛は十七歳の子、清宗よりも劣格であることを露呈する形になっている。

同様なことは処刑の場面（巻第十一「大臣殿被斬」）についても言える。宗盛は、「ゆめ／＼余念をおぼしめすべからず」と善知識の僧が諭したにもかかわらず、念仏を止めて「右衛門督もすでにか」と述べ、清宗のことを心に掛けた時に斬られてしまう。一方、

清宗は、「今はおもふ事なし。さらばとう」と潔い覚悟を口にして、最期を遂げている。宗盛は死に到るまで見るべきものが見出せずに、臨終正念という極楽往生に不可欠とされる様式を保てなかったことになる。極楽への往生が「事実」として提示されている建礼門院（灌頂巻「女院死去」）はもちろん、「願くは逆縁をも」て順縁とし、只今の最後の念仏によ（シ）て九品託生をとぐべし」と述べて首を打たせた重衡（巻第十一「重衡被斬」）や、妻子への愛執ゆえに死をためらうものの滝口入道の論しによって翻心し、念仏を唱えて海中に身を投げた維盛（巻第十「維盛入水」）らは、自らの行く手に極楽世界の莊嚴な光を意識し得た。だが、宗盛の前には果てしない無明の世界が広がるばかりなのである。

ただし、死の場面では、宗盛の言動に対して、以前のような「口惜し」「うたてし」「はかなし」といった批判的、否定的な評価は示されず、『右衛門督もすでにか』との給ひけるこそ哀なれ」と同情的なまなざしが注がれている。宗盛は、朝家の重臣としても、武家の棟梁としても存在意味を徹底的に否定され、社会でも集団の中でも無用の人物と捉えられているが、それは自身の立場において見るべきもの、さらにはその立場自体を意識化していないことによる。また、彼には、自らの凡庸さや罪業を見つめ直すような自省的な姿勢もなく、したがって仏の衆生済度の本願をたのむような精神状況には到らない。自己の精神の救済を図ろうという志向を持っていないことは言うまでもない。そのような宗盛だが、子を思う父としての存在意味は認められている。宗盛は清宗よりも劣格であるとされながらも、子への深い愛情を持った父として形象化されていることは疑いようがないのである。

たとえば、都の大路を渡された日の夜、宗盛が傍に臥す清宗に自

分の袖をかけてやる場面（巻第十一「一門大路渡」）は印象的である。また、この場面の直前には、宗盛と清宗が、「たがひに物は給はねども、目を見あはせて、ひまなく涙をながされけり」という状態であったことが語られている。社会的、集団的、信仰的に無定見である宗盛も子には確かなまなざしを注ぐ。また、ただ子からは確かなまなざしを受けている。清宗ももちろんだが、特にわずか八歳の副将は父宗盛をひたすら慕う（巻第十一「副将被斬」）。父と自らが置かれている過酷な状況を察知し得ないようなこの幼い子にとって、宗盛は暖かくかけがえのない父以外の何者でもなく、それを超えた他からのいかなる意味づけも無意味である。作中に清宗と副将のみなざしが設定されることによって、宗盛の存在は確かな重みを帯びる。

だが、そのまなざしはいつまでもとどまっていはいない。副将は久しぶりに宗盛と会えた翌日には斬られてしまっている。このように『平家物語』における近親者の対面はあまりにはかない。外部からの強制によって対面の機会は永遠に断たれてしまうのである。そればかりか近親者への恩愛の情そのものも自ら断ち切るべきであるとされている。これはほとんど不可能なことであるに違いないが、その不可能を可能にする人物が作品世界に光芒を描き、鮮やかな残影をとどめる。『平家物語』の世界では、優れた人物の非凡な行動が肯定される。非凡な行動性がなくば、非凡な高貴さか美しさを持たねばならず、平凡さがそのまま劣格と意味付けられてしまう過酷な世界なのである。平凡な人格はその世界の過酷さの中で行き場のない苦悩、苦痛を表すことにおいてのみその存在を認められる。宗盛と近似した状況にある者としては藤原成親や俊寛がいる。ただし、成親も俊寛も、宗盛とは異なり、悲惨な境遇の中で最終的には仏道

心を保つ境地に立っているのである。それに対して、宗盛は尽きることのない恩愛の情ゆえに、仏の本願が届かぬ無明の世界に転落することが暗示されている。

このような宗盛と対照をなすのが建礼門院徳子である。女院は、「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ」という聖衆来迎の顕証が現れる中、息を引き取ったとされている（灌頂巻「女院死去」）。まさに目の前に莊嚴な光に満ちた極楽世界が開かれるのが明示されているのである。建礼門院も宗盛と同じく近親者への思いに捉われるが、その人々はすでにこの世になく、再会の唯一の可能性を求めて、自らと近親者の亡魂の極楽浄土への転生をひたすら祈る仏道生活を営む。灌頂巻に描かれるこのような女院の姿には、悲嘆に沈む心の闇からの鮮やかな自己救拔が認められる。しかも、仏道生活においてなされている祈りによって、作品世界に平氏一門の人々の亡魂が救済へと向かう回路が開かれることになる。女院は平氏一門全体の運命にかかわるきわめて重要な機能を果たしているのである。仏に対する祈りの心の有無をもって、建礼門院と宗盛とは存在のあり方において際やかな明と暗とに分かたれている。しかしながら、無明の世界への転落と引き換えに宗盛が最後に残した「右衛門督もすでにか」という声は、批判や否定の粹をすり抜けてかすかにではあるものの作品世界に響き、確かな重みを伝えていくのではないだろうか。「哀なれ」という人間理解の光は寂しく淡いものではあるが宗盛の存在に届いている。

五 宗盛の機能と類型性

『平家物語』の世界は過酷である。強烈な断念が要求され、それをなし得る人物であってこそ存在の意味が認められる。ただ、鮮や

かな断念をなし得る資性はきわめて自己完結的である。

たとえば、重盛は「良臣」、「孝子」という存在の根柢を保つたまま生きられないのを悟った時に、父清盛が勧める宋朝の名医による治療を峻拒し、嫡男維盛に大臣葬で帯びる太刀を渡して、彼らの悲嘆や前途を慮ることなくすみやかな死へと向かう。

また、知盛は、武門としての平氏の潰滅を見届けるともはや「見るべき程のこと」はないとして潔く自害するが、限界状況にあるとは言え、その折の彼の意識から自らの死後も生き続ける人々への懸念は鮮やかに切り捨てられている。壇の浦合戦の敗北が確定した場面においても、女房たちに「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ」と「からく」と笑って語る知盛と、それを聞いて「なんでうのたゞいまのたはぶれぞや」と「おめきさけ」ぶ女房たちとの間には埋めがたい心の断絶がある（巻第十一「先帝身投」）。

理は見るべきもの、価値あるものを明確化すると同時に、ある事象を意識から除外してしまう。理は不可避的に自己完結性を帯びるが、それゆえにこれを相対化するまなざしは提示された価値や意味に深刻なかけりをもたらず。特に理と理との突き合わせは相互の自己完結性を相対化を伴って露呈させる。たとえば、重盛の理と知盛の理とは相容れないところがある。重盛の諦観を前にしては、知盛の営為は徒勞に過ぎず、特に軍事行動については国家的、社会的な思量の欠如を問われかねない。逆に、知盛の倫理からすれば、重盛の死のあり方は立場の放棄、責任の回避として論外のものであろう。だが、作品世界において、このような理と理との突き合わせは周到に避けられ、価値相対化は叙述に現れない。そこに宗盛の存在がいれば緩衝帯として機能している。たとえば、重盛と知盛との対置、対照はまったくなくないが、重盛と宗盛、知盛と宗盛という

それぞれの対置、対照は優劣を際立たせるものとしてことさら提示されている。重盛と知盛の間に宗盛が△暗部▽として介在して両者が照応し合うのを遮り、重盛、知盛のそれぞれは完全に劣格である宗盛との対比によって個々のかげりなき優越性をアピールする形になっている。また、作品世界最大の「悪行者」清盛を批判するのは平氏一門では重盛だけだが、知盛をはじめとする一門の人々は、棟梁、家父長である清盛の意向に従ったとするのが自然と思われるものの、個々の立場はほとんど示されず、非難、責任の圏外に立ち得る。重盛の理や人格に照らしての批判は彼らには届かない。ただひとり宗盛が清盛の傀儡、後継者という悪しき位置に立たされ、重盛と対比されて批判の的になっている。さらに、清盛と知盛らとのかわりも、宗盛の介在によって不連続化される形になっている。清盛の政権下の平氏についての悪しきイメージは宗盛ひとりを受け継ぎ、かかえ込むことになる。作品前半で批判的となっていた平氏という存在が、後半では賞賛や同情の対象になるという大がかりな仕掛けも宗盛の△暗部▽としての一貫した機能に支えられていると言っても過言ではない。

そして、『平家物語』に登場する人物の中で、宗盛が最も対座、対話の場面が多く、他の人物と関係性を持つことも最も多いのではないだろうか。そのような中で、彼はさまざまな人間関係の間に△暗部▽としての自らの存在を滑り込ませている。

たとえば、知盛と重衡との間にも緩衝帯として介在する形になっている。一の谷合戦で捕虜になった重衡に関して、三種の神器を返すならば彼の身柄を引き渡すという旨の後白河法皇の院宣が屋島の平氏にもたらされる。平氏の人々がいかに対応すべきか僉議する中、宗盛は、母二位殿時子が重衡への思いゆえに院宣に従うよう願うの

に對して、それを拒絶する発言をせざるを得ない。特に、「且は中将一人に、余の子ども、したし人々をば、さておぼしめしかへさせ給べき歟」という言葉は、弟重衡の存在価値を量るような意味合いを含んでしまっている。その後、知盛が「三種の神器を都へかへし入たてまゝたりとも、重衡をかへし給はらん事ありがたし」と、重衡への思いのほどを露呈せずに、院宣に応じない旨の発言を行い、これが僉議を一決に導く（巻第十「請文」）。宗盛はここでも損な役回りであり、知盛は薄情のそしりを免れているばかりか冷静さや明察力をアピールしている。

また、平氏一門の中で最も離反を嫌悪するのが知盛だが、一門から脱走した維盛とかかわりを持つのはその知盛ではなく宗盛である。維盛が屋島の平氏の本営を離れた主な理由は妻子への思いであるが、彼は高野山で滝口入道に有力な副次的要因も語っている（巻第十「高野巻」）。それは、「おほい殿も二位殿も、『この人は池の大納言のやうにふた心あり』なごどどと思ひへだて給しかば」と言っているように、宗盛と二位殿時子からの精神的な疎外であった。まず宗盛が挙げられ、二位殿の名はあっても、知盛はじめ他の人々にについては触れられていない。このように宗盛は一門を代表するような存在とされる時にかぎって、否定的な存在性を帯びてしまう。作中の知盛は維盛におもしろからぬ感情を抱くはずではあるが、そのようなことは一切叙述されていない。知盛には維盛を疎外したり、批判したようなことはないという形になっている。そして、維盛は宗盛から疎外を受けたことを告げる言動をもって逃亡の不名誉を軽減されている。

肯定的に捉えられている多くの平氏一門の人々は行動の志向や心性を大きく異にしているが、互いに存在性を照応させる場面はなく、

おのおのが全肯定されるべき存在として鮮明な輪郭を持ち、作品世界に鮮烈な光芒を描く。そこには、宗盛という△暗部▽が個々の形象間の照応を遮断する緩衝帯として有効に機能しているものと考えられる。平氏一門の滅亡を描く上での脚色も美化も同情も鎮魂も宗盛を規範性、様式性なき△暗部▽としておとしめることによって矛盾なく鮮やかに実現されているのではないだろうか。さらに、『平家物語』の作品世界の権威性や構築性も、宗盛が安定的な批判、否定の対象であることによって強度を飛躍的に増していると考えられる。『平家物語』の宗盛は冷笑されるべき特異な形象となつていくが、それゆえにきわめて重要な機能を担うことになる。そのような宗盛はひとりの登場人物である前に作品世界の機構を支える装置である。彼は、作品世界のきしみ、矛盾、かげりを除去する装置としての側面を持っていると言えよう。

△暗部▽があつてこそかげりなき光芒は保証され、その射程は伸びやかに拡大する。山下宏明氏が言われた『平家物語』における「対照法」は、光と光とを対照するものではなく、圧倒的な価値落差を持った明と暗とを対照するのである。その中で△暗部▽である宗盛は、政治、社会、集団、信仰などあらゆる領域で何ら自己完結せずに、その各領域で自己完結した人々の引き立て役に回っているのだが、その宗盛の自己完結は子を思う親としての自らの心の闇においてであった。負性、劣格性をかかえ込むがゆえの宗盛の△暗部▽としての重大な機能を考えるに、彼は『平家物語』が哀れで美しい物語であるための供儀であるとさえ言えよう。

ただ、そのような過酷な役回りを宗盛に強いてきた『平家物語』も彼の最後にして唯一の自己完結まで否定しない。「右衛門督もすでにか」の声は批判、否定の杵をすり抜けて「哀れ」と捉えられ

ながら、同情どころか共感さえも喚起する力を持つて享受者に届く。その一点をもつて、宗盛の存在は冷笑されるべき特異な形象であることを越えて、共時的にも通時的にも妥当性を帯びた類型としての重みを持つ。子を思う親の類型としての存在の重さはもはや批判、否定を寄せ付けない。ここに、非情な戯画化に徹し切らぬ『平家物語』のあり方を見ることが出来る。藤原信頼を疎外し切った『平家物語』とはその点が異なっている。『平家物語』は明確な輪郭と鮮烈な光芒を志向しつつも、それを保証した△暗部▽をぎりぎりのところで支え、その重さを確かめるような叙述の手つきを示すのである。

思えば、宗盛の形象には他者をことさら苦況に陥れるような酷薄な姿が目立って認められないのであり、むしろ政治的目的からではなく、自然な心性の発露として救いを示す場面が殊の外多い。このような温情ある人物としての形象化には一貫した志向を認めるべきであろう。ここで鷹尾純氏の指摘に耳を傾けたい。

宗盛は自己を社会的に位置づけることには極めて消極的であり、専ら家族関係の中に存在の基盤を求めめるタイプの人間なのである。勿論彼とて社会と全く没交渉ではあり得ない。宗盛が大納言大将を辞した年の十一月、清盛はクーデターを起すが、後白河法皇を幽閉するため院御所に向つた宗盛は「世をしづめん程、鳥羽殿へ御幸なしまいらせんと、父の入道申候」(三・法皇被流)と言う。そこに認められるのは、命令を受けたので最低限の責務を果すという姿勢であり、主体性は全く感じられない。その宗盛が、法皇・上皇父子の対面(四・厳島御幸)や以仁王の若宮の助命(四・若宮出家)に際しては積極的に行動するのだが、それは自分自身家族への愛情のみを生るの拠り所と

する宗盛にとって余りにも当然のことなのであろう。

「家族への愛情のみを生の抛り所とする」という規定は至言である。『平家物語』が宗盛をそのような人物として形象化している側面も鷹尾氏の指摘によって銘記しておかねばならない。また、氏が挙げられた、宗盛が他者のために尽力する二つの場面も重視すべきであろう。なお、筆者なりにひとつ注目したい場面がある。それは一の谷合戦直後に宗盛と知盛とが対面する場面である。まず、知盛が宗盛の前にやって来て、子の知章を見殺しにする形で戦いの場を逃れたことを慚愧する言を口にする。これに対して、宗盛は、知盛を責める言動を一切示すことなく、知章の行動を賞賛し、武人としての彼のすぐれた資質を挙げながら死を悼んで、同じく子を持つ親としての涙を流している。作中、子への情愛を痛切に語り合おうとするこの場面において唯一、宗盛と知盛との心の通い合いが認められるのである。作品世界にあって、宗盛は「家族への愛情のみを生の抛り所とする」立場をいささかも変えてはいない。そのような宗盛が社会的、集団的な場に引き出され、そこで徹底的に無意味な存在として冷視されるのは、時代状況の過酷さゆえでもあるが、何よりも『平家物語』という作品のあり方によるものである。

宗盛という作品世界の「暗部」に光を当てる時、『平家物語』の深層に横たわる仕組みがまたひとつ明らかにになる。宗盛の形象は、作品世界の機構を支えるための装置として有効に機能しつつ、同時にひとつの類型としての確かな存在感も持っているのである。その状況は、『平家物語』のしたたかさとふところの深さとをともに感じさせるのである。これは、宗盛という個別の形象が装置としての軽さと類型としての重さとを併せ持った手ごたえを伝えることと対応している。

〔注〕

(1) 「覚一本『平家物語』における平氏一門の運命の表現——平重盛、平知盛、建礼門院の存在様態と機能をめぐって——」(『日本文芸論叢』第七号 平成元・一〇)

(2) 鈴木則郎氏「『平家物語』における平宗盛の人物像」(『文芸研究』第四五集 昭和三八・一〇)

氏の考察は、『平家物語』の宗盛を本格的に取り上げた最初の論である。「玉葉」、「吾妻鏡」などの日記、記録との対比を交え、『平家物語』の宗盛の姿を完全な虚構とは言わないまでも凡庸、脆弱、劣悪といった面を誇張したものと捉えられ、その意味を作品全体の構想との関連に見出されている。筆者は鈴木氏の見解には全面的に賛同するが、氏が構想論を志向されたのに対して、登場人物の関係性に特に注目して論を展開する。

(3) 和田英道氏は次の二篇の宗盛論を発表されている。「宗盛像の再検討——覚一本『平家物語』における——」(『立教大学日本文学』第二六号 昭和四六・六)、「『平家物語』人物像の形成——例えば宗盛の場合——」(『立教大学日本文学』第二七号 昭和四六・一一)。

この中の先に発表された論文では、覚一本『平家物語』の宗盛像の肯定的な側面を明らかにすべく考察をされている。和田氏の指摘に対して筆者の見解がずれて、賛否を決しかねているところもあるが、たいへん貴重な示唆を得た。特に、本考察の後半部の「四」、「五」では、和田氏の指摘から得た示唆をもとに、筆者なりに宗盛像の肯定的側面を提示しようと試みている。

和田氏はさらにもう一篇の論文で、宗盛像について、『平家物語』諸本間での異同を明らかにされ、その上で、宗盛像の形成過

程の検討や、『平家物語』諸本の品等論を試みておられる。今回の筆者の考察は寛一本のみを検討対象とするので直接にはかわらないのだが、教示されることが多かった。

(4) 山下宏明氏「平家物語論のために——物語と人物像——」(『日本文学』第三〇巻第九号 昭和五六・九)。のちに、『軍記物語の方法』(有精堂 昭和五八・八)に再録されている。

(5) 以後、「大系本」と略記する。また、本文の引用に際し、漢字の旧字表記は新字の形に改めた。

(6) 筆者は、『平家物語』の重盛について、注(1)の論文の外に、『平家物語』における平重盛像の考察——物語における機能と文芸的意義をめぐって——(『日本文芸論稿』第一五号 昭和六一・一一)において詳しく論じたことがある。

(7) 注(4)に同じ

(8) 注(2)の論文で、鈴木氏が日記・記録類の記述から明らかにされていることでもある。

(9) 注(4)に同じ

(10) 知盛は、巻第十一「逆櫓」の段においても、深い後悔を示す、同様の言葉を述べている。

(11) 石母田正氏『平家物語』(岩波新書 昭三三・一一) 一六頁

(12) 鷹尾純氏「二位尼と宗盛」(『国文学 解釈と鑑賞』第四七巻第七号 昭和五七・六)